

記録(ダイジェスト版)



## 第2期キックオフイベント

# 花と向き合う

令和4年6月4日(土) 10時~11時30分

於：南草津ロマンホール



### 次 第

オープニング セレモニー

第1部 生け花パフォーマンス

とミニ講話

第2部 パネルディスカッション

エンディング セレモニー

ひと・まち・未来研究塾 『つながり』

## 第2期・第1講座

《学びの主題》

# 心に残る瞬間を大切に！

自然を観察する心を養う学習

《構成》

### いけばなパフォーマンス&パネルトーク

オープニング	第1部	第2部	エンディング
プロモーション スライド あいさつ等	いけばなパフォーマンス 笹岡隆甫さんのミニ講話 インタビュー	パネルトーク 第1部の感想 意見交換	感想 スタッフと協力者の紹介 閉会・御礼のことば

《ゲスト》

## 華道 未生流笹岡 家元 笹岡隆甫 氏

略歴

1974年京都生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。  
2011年、三代家元を継承。舞台芸術としてのいけばなの可能性を追求し、日本-スイス 国交樹立150周年記念式典をはじめ、海外での公式行事でも、いけばなパフォーマンスを披露。2016年には、G7伊勢志摩サミットの会場装花を担当されました。

近著に『いけばな』（新潮新書）。京都ノートルダム女子大学客員教授。大正大学客員教授。京都市教育委員会委員。京都市の「DO YOU KYOTO?」大使として環境破壊防止を呼びかけておられます。



《司会者》

ドリームディレクター 宇野ひと美 さん

自分の夢に向かって今を精一杯生き、大切な人たちの夢も本気で応援し、一人でも多くの方に希望を実現してもらえる活動をされています。



《パネラー》

チーム光泉代表 北岡 沙彩 さん 光泉カトリック高等学校華道部主将  
チーム立命代表 阪口 元貴 さん 立命館大学大学院  
かがやきG代表 服部利比郎 さん 草津市議会議員  
つながりG代表 先川 且民 さん 大路区まちづくり協議会会長

## オープニングセレモニー



みなさん、おはようございます。本日の、ひと・まち・未来研究塾『つながり』のイベントにご参加くださりましてありがとうございました。

本日の司会を仰せつかりました宇野ひと美と申します。光泉カトリック高等学校と立命館大学を卒業した私にとって、大変嬉しいお役を頂きました。

最後まで宜しくお願いいたします。

○ただいま、ご欄いただいた映像は、ひと・まち・未来研究塾『つながり』通称、研究塾『つながり』の第1期の記録をもとにしたプロモーションスライドでございました。

○今回から、第2期となりますが、第1講は、昨年準じて公開方式で多くの人と一緒にすすめる出発式のような形式とさせていただきます。まだまだ、新型コロナウイルス感染の対応が必要な時期にありますので、大きな声は慎んでいただき、拍手で声援をさせていただきますようお願いいたします。

○初めに、ひと・まち・未来研究塾『つながり』の代表 川瀬善行よりごあいさつを申し上げます。



(川瀬) 今日は、小さなイベントのつもりで準備を始めましたが、案内を配っていくうちに、だんだんと(入場券を求める人が)増えてきました。

そのようなことで、当初予定より座席数を増やしましたが、来ていただけるか不安に思っておりました。本当によく来ていただきました。ありがとうございます。

ご承知のとおり、1年前にこの研究塾をスタートしました。ここまでコロナが続くと思っていまらなかったですが、その時に、コロナ禍において「私たちができる事は何だろう」と思っていたときにできることは“学習かな”ということをお願いしました。そして、「草津市のまちの形づくり」をテーマに立命館大学の学生さんと一緒に学んできました。

本年度は、一歩、広げて、光泉カトリック高等学校の生徒さんが入り、少し「まち歩き」を入れながら“草津市の良さを発見していこう”と・・・このようなところでスタートをする訳でございます。

本日は、公開で行いますけれども、この試みに皆さんが賛同して下さることが何よりの励みでございます。最後まで十分楽しんでいただく。このことを本意として進めてまいります。どうか最後まで宜しくお願いいたします。

○次に、研究塾『つながり』の学長 藤井健史(ふじい たけし)からのごあいさつですが、本年度、立命館大学から金沢工業大学に移籍されたことから、リモートによるコーチングを主体にご指導をいただきます。本日は、あいにく、ご出席が叶いませんので、ビデオレターによるごメッセージをいただきました。



塾長 藤井健史

みなさんこんにちは。塾長の藤井です。いよいよ2期目がスタートすることになりました。これまで、塾長として運営に携わってきましたが、1期目を終えた素直な感想として、いろんな世代、さまざまな立場の人が集まって同じことについて学び、そして未来について語り合う場は、「本当に貴重な」と実感しています。

今期からは、高校生の方にもご参加いただけると聞いております。「より幅広い価値観を持って語り合える場になればなあ」と期待をしております。

本日のテーマ「花と向き合う」で笹岡さんにお話をいただく内容には、先に述べた「この塾のめざすところ」にも通じるところがあるようで、大変興味深く感じております。また、私自身の立場から考えると、建築やまちづくりをすすめていくにあたって、“花”や“緑”というような自然の豊かさをどういうふうに享受していくかが重要な視点になってきます。そのような観点で、本日のテーマは非常に楽しみにしています。また、本日のテーマは究極的に我々が豊かで幸せな人生という誰にでもあてはまる根本的な問いにつながっていくと思われまますので塾生のそれぞれがそれぞれの価値観や観点から自由な意見交換の場になれば・・・と思っています。みなさんに、「楽しんで帰ってもらえればいいなあ」と思います。

○ このイベントに草津市長の橋川 渉様からメッセージをいただきましたので、ご披露させていただきます。  
【メッセージ 朗読】

こんにちは、草津市長の  
はしかわ わたる  
橋川 渉です。



草津市  
Kusatsu City

ひと・まち・未来研究塾『つながり』の  
第2期キックオフイベントの開催、誠におめでとうございます。

ここ数年続く新型コロナウイルス感染症の影響により、  
コミュニティの希薄化が進み、人と人との『つながり』の  
減少が全国的な課題となっておりますが、

そのような中、ひと・まち・未来研究塾『つながり』のよう  
に、様々な年代の方々が交流しお互いに研鑽し合う場は、  
非常に大きな役割を担っていただくものであり、第2期とし  
て継続していただきましたことを大変心強く感じております。

また、第2期は『草津市の魅力の発見とシティセールスの  
展開を考える』をテーマとし、塾生の対象を高校生にまで  
拡大され、更に、フィールドワークなども取り入れながら、  
活発な研究塾として展開されますことに敬服しております。

本研究塾の『つながり』が、人と人、人から地域、まちへ  
と広がる新たな“つながり”を生み出し、草津市の明るい未  
来へとつながりますことをご期待申し上げます。

令和4年6月4日



草津市長 橋川 渉 

## 第1部

# いけばなパフォーマンス・笹岡隆甫のミニ講話・インタビュー

## 【華道 未生流笹岡 お家元の いけばなパフォーマンス】



## 【笹岡隆甫のミニ講話】 抜粋

……生け花というのは花を美しくさせるテクニックなのだ、技術を磨こうと思って、学生時代まで花と触れ合ってきたのですが、自分が大学院に入った頃から花を教え始めます。教えていると、テクニックだけを教えていてもおもしろくないのです。これを一生の仕事にするのは違うのではないかと。テクニックを教えるのが生け花の道なのかと考えさせられたのです。

### 「うつむいたら あかん」

これは生け花の美の法則ですけれども、その裏側には、人生を美しく見せるための、美しく輝かせるためのヒントが隠されているのではないかと教わりました。祖母は、祖父の「うつむいたらあかん」という教を自分の人生で実践した人だったと思います。今はこういうコロナの状態でも、みんな、ついつつおきがちだけれども、そんなときにこそ前を向いて、上を向いて生きていかなければいけないのだと花から教わります。

### 「日本人の花との向き合い方」

今日生けたカエデですけれども、これは緑一色に見るのですが、ちょっとだけ先の色が変わっているのがお分かりでしょうか。少し黄色や赤に変色するのです。新芽がこういった色合いのものもあるのですが、こういうものを照葉（てりは）と呼んでいます。秋の紅葉ももちろん照葉ですけれども、新緑で少し色が変わっているものもあって照葉と呼びます。

我々生け花の人間はこの照葉がすごく好きで、何かこう、時間経過、移ろいみたいなものが封じ込められているように感じませんか。西洋のフラワーアートの場合は、最高の瞬間を演出しようとするので、開いた花、盛りの花を敷き詰めて花のカーペットをつくる。開いた花が主役だとします。でも生け花は、開いた花があってもいいけれども、つぼみがちに生けなさいと教わります。これは、生け上げた瞬間は完成ではなく、ここから変わっていく、つぼみがほころんで満開になって散っていく、この命の移ろいを最後まで見届けるのが“いけばな”だという教えです。

### 「つぼみがちに生けよ！」

この変わっていくということがとても大事で、例えば桜が少しほころびかけた頃、もうすぐ開くなどわくわくして、満開の桜の花の下を友達と肩を組んで闊歩して、そして散る姿にさえ美を感じる。そんな移ろいを大切にしてきたのが日本人の花との向き合い方ではないかと思います。

### 「移ろいを極める」

照葉(てりは)というのはその移ろいを内に封じ込めているようにも思いますね。

今日の大きなテーマは「つながり」ということですが、私達は照葉を見るとこの社会を思い浮かべるのです。緑があって、黄色があって、赤があって、ちょっと茶色もあって、老若男女、趣味も嗜好も違う人たちが互いに助け合って世の中というのは成立しています。



広い世代の話聞くことで 視野が広がり、人間としての厚みが増す。

それは、『自分の中に、移ろいを秘める』ということなのかも知れません。

今日も皆さんとともにたくさんの学びがありますように願っております。お付き合い、ありがとうございます。

### 【お家元にインタビュー】

〇なるべく多くの方々から御質問をいただきたいところでしたが、コロナ禍のため、会場の皆様から声を出していただくということはないままで、あらかじめ光泉カトリック高等学校の華道部の方々に質問を寄せていただきました。



① をご指名くださり ありがとうございます。

質問します。



お好きな花は、何ですか？  
それは、なぜですか？

○ 「お好きな花は何ですか。それはなぜですか。」これは、華道家の先生にとっては結構難しい質問かもしれません。

(笹岡) そうですね。我々にはなかなか難しく、本当に好きな花はあるのですが、例えば流派の花であるカキツバタが大好きですが、生けているその時の花が好き

だと思いたいとは思っているのです。今日はヤマアジサイを生けていますけれども、このヤマアジサイというのはすごくきれいだと思いませんか？ 大輪のアジサイもみずみずしくて元気をもらえるのですが、こちらは装飾花が元々は白いのです。ここの部分が白いのが徐々に変化していく。まさに照葉と一緒にですね。ちょうどこの時期になると、庭にも植わっているのですが、このヤマアジサイが白から徐々にピンクになって赤く色づいていく、そんな姿を目にして、何か元気を分けてもらえるような気がします。こちらも移ろいを内に秘めた美しさを持っているお花で、我々はどちらかという主役級の花よりも、ちょっと楚々とした可憐なお花のほうに引かれるところがありますね。

○ なるほど。追加の質問を勝手にさせていただいてよろしいですか。もしも女性の方に記念日などに先生がお花をプレゼントされる際に、この花は選んでしまいがちとか、そういったことはございますか。急な質問で申し訳ございません。お好きな花が主役級よりも脇役級とおっしゃっていたのですが、人にプレゼントされる時は少し主役級をメインにされるのかと思うのですが。

(笹岡) いや、そうでもないです。そんなに大きな花を選ばないです。しかも、楚々とした花を1種類1本ずつで何種類かという合わせ方をします。同じ花をわーっと、例えばバラの花束みたいなものを差し上げることはほぼなくて、自分でお花屋さんへ行って、1本ずつ選んで、ちょっと細かい花を合わせます。

② をご指名くださり  
ありがとう  
ございました。



生け花を  
外国人に伝える時  
生け花を  
伝えるポイント  
はなですか。

(笹岡) そうですね。海外からいらっしゃる方に花を楽しんでいただくことはもちろんあるんですが、テクニク的な意味合いでは左右非対称の美というのを伝えます。左右対称の均整が取れたものも美しいけれども、日本人はあえて不完全を尊ぶ、不完全で、未完成で、ちょっと動きのある

デザインをつくり上げる。

ここにはいろいろな意味合いがあります。例えば日本の空間というのは片側に縁側があってそこから光が差しってくる。明るい空間と暗い空間があるんだから、当然そこに生ける花は明るいほうに大きく、暗いほうに低くというような左右非対称になるという解釈もありますし、また、生け花だけではなく、建築やお庭にも左右非対称が結構見られますね。山があって池があるというような日本庭園の造り方を見ても、どうも日本人は左右非対称、不完全が好きだと。どんなテストでも満点を取るダヴィンチみたいな人間もすてきだけれども、苦手なものがあるほうが人の痛みが分かり、お互いに助け合ったり補い合ったりする。思いや



りやいたわりは日本人の美德と言われますけれども、そういった弱みがあるからこそ人間らしいという考え方が、もしかしたら日本のデザイン、左右非対称にも表れているではないかというお話をしたり、もちろん移ろいの話はとても大事ですけれども、そのようにお話をしております。

③をご指名くださりありがとうございました。

 質問します。

今の高校生について、どう思われますか？



(笹岡) 大きい質問ですね。

どうなんですか。高校生たちが今日お手伝いをしてくれて、すごく若々しくて、かわいらしいと思います。自分が高校生のときはどうだったか、もうはるかかなたで思い出せないのですが、今、見ていて、素直な子が多いとは思

うのです。自分が高校生のときも多分表向きは素直だった気がするのです。でもそうではないところも当然あるはずで、もっとやんちゃな部分を出してくれたらおもしろいのには思うのです。先ほどツルバラの話をしましたけれども、まっすぐもいいけれどもちょっとやんちゃなほうが人間らしいところがあるので、反発するようなキャラクターも見られたらうれしいなとは思っております。

④をご指名くださり ありがとうございます。

残念ながら、このBOXへの投函はありませんでした。



はずれ ですね ……

番号選びの画面に  
戻らせていただきます。

○司会者 ありがとうございます。では続いて参りましょうか。お時間が許す限り参りましょう。4 番でお願いします。

お家元、4 番ははずれでございました。(笑い)

⑤をご指名くださり ありがとうございます。

質問します。



滋賀県の魅力は、  
なんだとおもわれますか？  
草津市で、出かけたところで、  
印象に残っているところは、どこですか？

Note 滋賀県の総面積40,173.8km<sup>2</sup>  
(うち琵琶湖は670.25km<sup>2</sup> 全体の1/6)  
草津市の総面積 67.82km<sup>2</sup> 琵琶湖の1/10



(笹岡) 草津はもちろんよく寄せていただいて、水生植物園が華道家としては一番好きですね。今はなくなってしまってすごく残念ですけれども、まだハスが群生していた頃に、一度あそこでハスを生けたことがあります。

近くのハス畑で農家の方をお願いして、切らせて

いただいて、その切らせていただいたものを水揚げするのですが、ハスというのはすぐ水落ちするのです。だからポンプで強制的に切り口から水を揚げるのですがそうやって水揚げしたものを持って行って…

ハスは御存じのとおり、レンコンの茎の中に穴があるのでワイヤーが簡単に入ります。ワイヤーを入れると曲線がつくりやすい。普通に曲げると折れてしまうので背骨を入れてから曲げるといことをするのですけれども、そうやって形を整えて生けたのがすごく印象的でした。

また生きたいのでハスの群生が戻ってほしいです。



⑥をご指名くださり ありがとうございます。

質問します

・日本の生け花は、  
どのように発展していくと思われますか？



(笹岡) そうですね。日本文化というのは、私が仕事を始めた頃から右肩下がりとされていて、若い子たちがなかなかやってくれない、そして長続きしない。趣味の多様化とか少子化とかいろいろな

理由があるとは思いますが、でも生け花というのは伝統文化の中で唯一命に直に触れる文化です。これはすごく大事だと思います。

今は、山登りや木登りは危ないからあまりさせない傾向にありましてけがというものはあまりしなくなりました。でも痛みというものを知るということはすごく大事で、花は生けていると絶対に枯れる、しおれてしまう。でもその姿を見るからこそ少しでも元気でいてほしいとお世話をする気持ちも生まれてくる。そんな花から学ぶ時間というのはぜひ子供たちにこそ持ってもらいたいと思っています。

私は京都に住んでいますが、京都市では、京都市立の全中学校で授業中に必ず一回は生け花を学ぶというプログラムをスタートさせました。4年前からスタートさせて、今年ようやく全校実施ができませんでした。これから毎年全校実施をするのですが、京都の市立の中学校に通ったら絶対に花を学ぶ。これは1と0で大きな違いなので、華道部のようにしょっちゅうお稽古をしてくれるのが本当は理想ですが、それがかなわなくても、1回経験しているとやはりものすごく大きいと思うのです。ああ、あんな文化があったなと思えます。

日本文化というのは自然との距離感が肝だと思っています。自然がものすごく身近にあって、その自然とうまく付き合っていく。付き合っていくという言い方が悪いかもしれませんが、本来人間も自然の一部ではないですか。人間も自然なんだというものの考え方が日本人の根底にはしっかりと流れていたけれども、今はついそれを忘れがちになる。学校でSDGsを当たり前で学ぶけれども、その背景には人間も自然の一部だという物の考え方が必要なのではないか。それを発信するのが我々日本文化の一つの意味かと思っています。



世界をハッピーにするために人間も自然の一部だという価値観を広げていく。これが生け花の一つの役割で、それをするためにまずは、中学生たちに花を教えています。小学生でもいいし、幼稚園でもいいし、ぜひ草津市でもそれを実行していただけたらうれしいなと思っています。

○ ありがとうございます。お家元には、短い時間でしたが全ての質問にお答えいただきました。以上でインタビューコーナーを終了いたします。ありがとうございます。

《追録》 笹岡隆甫の生け花ギャラリー

## 第2部

Relation

# パネルトークのコーナー

## 【第1部の感想】

- 皆様、笹岡隆甫様のミニ講話、先ほどいろいろなお話をいただきましたが、印象に残ったことを話し合しましょうということで、事前に、先ほど講話を聞いていただいて、パネラーの皆様にはスケッチブックに書いていただきました。一斉にお出しいただきましょう。それでは皆様、お願いいたします。



- ではまず、「花と人生」気になりますね。阪口さん、「花と人生」お願いできますか。



(阪口) よろしく申し上げます。花と人生ということですが、お話を聞かせていただいてすごくお勉強になりました。

大きく2つのエピソードを話していただきました。まず「うつむいたらあかん」ということ。「うつむいたらあかん」というお花の技術というもので人生のヒントを得たという話があって、お花から人生を考えることができたということをおっしゃっていました。その後の照葉のところ、一つの葉っぱの中に時間軸が隠されているという話があって、そういうものと、おばちゃんがいろいろな人を励ましていて、自分の人生を全うせなあかん、そういうものがお花にも表れているのではないかとということで、人生から花というふうに考え方を転換できたということがありました。

そういうことというのは私たちの生活でも、生活をする中でいろいろな趣味やお仕事があると思うのですが、そういう中から人生に考えを置き換えることができたり、また自分の人生の体験から、それが仕事であったり、趣味に置き換えることができると思うのです。そういうことがすごくお勉強になったと思いました。

ほかにもそのようなエピソードがあるなら教えていただきたいと思ひまして、質問をさせていただきたいです。

(笹岡) ありがとうございます。おばあちゃん先生、私の祖父母の世代の先生が、花を処分するときに必ず半紙、和紙に包んで、日本酒で清めて、手を合わされるのです。時には涙を流しながら。ふだん私たちは毎日のように花を生けるので、1週間、2週間咲いた後、つまり毎日傷んだ花

が出るのですが、毎度毎度半紙で包んで日本酒をかけて清めて手を合わせるといことはなかなかできないのです。でも花を供養するというか、美しい姿を見せてくれてありがとうという自然に感謝をする、これが美しく生けること以上に大事だということをそのおばあちゃん先生は教えてくれたのだと思います。それで、処分するときはぽんと捨てるのではなくて、少なくとも感謝の気持ちを、心の中で手を合わせながら処分するようにそれから心掛けています。

(阪口) ありがとうございます。この状態だけが生け花のよさということではなくて、花にも人生がある、花の一生があるということを考えることが生け花の美学といいますか、それが私たちの生活にも通ずるものであるということですね。すごく勉強になります。ありがとうございます。

○ 日本酒をかけてというのはすごいことですね。でも考えたらそうですね。花として、植物として生きているものを、人生をチョキッと切るわけですから、なるほどなと感慨深いものがありました。ありがとうございます。

○ では先川さん、「うつむいたらあかん」ということで、その下にも書いていただいています。

(先川) 私は「うつむいたらあかん」という言葉がすごく印象的でした。

なぜかといいますと、この言葉に勇気をいただいたからです。

といいますのは、「うつむいたらあかん」ということは、上を向いてということですね。そうすると、我々の年代でいきますと、坂本九の「上を向いて歩こう」をつい思い出してしまいます。私もカラオケに行くんですけども、よくこの歌を歌いまして勇気をいただいています。



人というのうれしいときよりも悲しいとき、悔しいときのほうが涙が出てくる。その涙を、上を向いてこぼれないようにという歌、そしてこれの下りには、曇りの向こうには幸せがあるという歌詞になっています。これが非常に印象に残っておりまして、いつも口ずさんでいるのです。

それとこの「うつむいたらあかん」ということが何となくダブってきました。

そういう意味で勇気をいただいたということで、この言葉を出させていただきました。

先生、いかがでしょうか？

(笹岡) ありがとうございます。私も坂本九さんの「上を向いて歩こう」は好きです。

「うつむいたらあかん」というのも常に思っているのですが、それでもやはり嫌なことがあったり、悔しいことがあったりすると、ついつい下を向いてしまうのです。私は花を生けます、もしくは花を教えます。そのときに、例えば花の顔を上に向けるというふうにご子たちに教えていると、そうだと、自分も上を向かなければと、教えることでかえって教わるような時間を過ごしています。

いつも思っているのですが、実践するのは意外と難しく、人間はやはり弱い動物だと思うのです。でもつらいときにこそ花を生けて、花からいろいろなことを教わっていきたくて思っています。

(先川) ありがとうございます。

○同じく、「うつむいたらあかん」ということが印象に残ったという北岡さん、お願いできますか。



(北岡) 家元様のお話を伺って、私たちが思っているヒマワリというのは太陽に向かってすごく明るく咲いているというイメージばかり持って行って、確かに下を向いているとしよげた感じになっているということに気づかされたと思います。

私自身はちょっと悲観的になりがちなのですが、下に弟がいて、弟は逆に楽観的です。怒られたり、テストの点数が悪かったりしてもすぐ切り替えて明るく振る舞うような子ですけれども、私はそれを見て、今日の家元様のお話ともリンクするところがあるとすごく思いました。上を向いて明るく日々過ごしていくこと、それが大切だということに改めて気づかされました。

(笹岡) 多分誰もが楽観的なわけではないと思うのです。つい消極的になってしまう、後ろ向きになってしまうことが誰しもある。それをそのまま下に行くのではなく、ちょっとでも上を向いていきたいと心がけるのが大事で、それを教えてくれるのが花だろうと思っています。

○先ほどの話ではないですけれども、ヒマワリやバラのように元気をもらえる花ばかりではなく、お花にも本当にいろいろなお花があって、ちょっと寂しいときに寂しげなお花であっても、ずっと見ていると自分の気持ちを花に映しているような。そうやって観察すること、花と向き合うことというのは大事ですね。そうした時間を持つということも大事ですね。

(笹岡) 本当ですね。私は小さい頃、子供の頃、アジサイの花が好きで、雨に打たれたアジサイを縁側に座ってぼーっと見ているのが好きだったのです。そんなに暗い子ではなかったはずなんですけど、でもその時間というのは結構豊かで、雨音が聞こえてきて、アジサイの花色が美しく、それは普通の西洋アジサイだったので、こちらのヤマアジサイのように色が変わっていくわけではないのですが、アジサイというのは一個一個の花は小さいですが、集まるとすごい力になるというような、人間も多分そうで、一人一人の力は小さいけれども、これだけたくさんいたら何か世の中を動かせるといったようなメッセージが込められているのかと花を見て感じたり、そういういろいろな解釈ができるのが花のおもしろいところ、自然のおもしろいところだし、人間の考え方の豊かなところなのではないかとも思います。

○そうですね。私は不思議だと思うのは、お花見や紅葉のシーズンになると、花に興味がないという方でもお花見に行ったり、秋にはもみじ狩りに行ったりされると思うのですが、桜を見てきれい、秋の真っ赤な紅葉を見てきれいと思うその心ですね。美意識を磨いて行って、それが人間としてやさしくなったり、何かの気づきが自然とそうになっているのですが、またそこに気づいていない方はぜひもっと気づいていただきたいですね。

○ では、服部さん、お願いできますか。

(服部) 私は技術を磨く、すなわち自分や周りの人を幸せにするというお話をお伺いしてなるほどと思ったことがございます。

一つは、技術を磨くということは、もちろん生け方というのもそうですけれども、やはりこういうふうにして時を移ろって育ってきたお花を再度輝かせて、それをまた人に見てもらう、その過程の中で、これまでにあったお話全てがそうだと思うのですが、そういうよさを伝えていくとか、花を生けたその後から、先ほども枯れたお花に命の大切さをしっかりと学んでいく、感じていくというお話があったと思うのですが、全て伝えていくとかそれを繰り返していく技術、それも全部技術なのかと感じました。技術だけを教えていても駄目だというお話だったと思うのですが、技術ということが全てを物語っているのかと思います。

そして、我々は先生からお話を聞いてなるほど。それで終わりではなく、そういうふうな人を幸せにしていくといった大それたことは多分できないと思うのですが、自分がいろいろなことに対して技術を磨いていくこと、また伝えていくということが、人に幸せな気持ちになってもらえる瞬間づくりにつながっていくのではないかと感じました。

これもそうですけれども、今日の「花と向き合う」というタイトルを聞いたときに、昔、誰かに聞いたのですが、仏壇にお供えするお花や床の間に飾っているお花、特に仏壇ですが、仏さんにお花を供えてお参りしたりするんですけども、仏壇にお花をお供えするのに、お花は我々のほうに向いていて仏さんに向いていない、あれは仏さんにお参りをしているのですが、自分と向き合う時間だということで、お花を通して、そういう言われや教えがあるのだということをふと思い出しました。そういったところのお話を聞く、伝えていくというのも技術だと思います。技術を磨くという部分に関して、テクニック以外にどういうふうにお考えなのかということを知りたいと思いました。

(笹岡) ありがとうございます。生け花のテクニックはいろいろあるのですが、一番分かりやすいところでいうと、先ほどタブーとおっしゃいました。してはいけないこと。生け花の、古典の花の場合ですけれども、現代花はいいのですが、昔の花の場合は、枝と枝が交差しているもの、これは見切りといってタブー、禁忌だったのです。してはいけないこと。これは、ぱっと見たときに交差している枝があったらそこばかりが目立ちます。けんかしているように見えるのでよくないからどちらか一方を取り下げましょうという考え方です。

これは人生においてもそうで、つい、自分が、自分が といって出ていくと人とぶつかる、それはあまりよくない。例えばクリーニング屋さんで並んでいる方が「遅い」と言われると嫌ではないですか。周りの人をハッピーにしない。それはあまりよくなくて、そうではなく、とげを取るではないですが、少し自分自身を抑えることで1個1個の魅力が発信できるように、魅力を開花させることができるようにといった教えがこの見切りを取りましょうということだと思っております。

生け花で、花と花が交差しているのを切りながら、最近自分は我が我がという感じになっていたなということを思って、自分自身を見つめ直すという時間にはなるかなと思います。

○ よろしいでしょうか。花と向き合うことで、それが同時に自分と向き合うことになる。いろいろと勉強させていただいております。



## 主題の関する意見交換

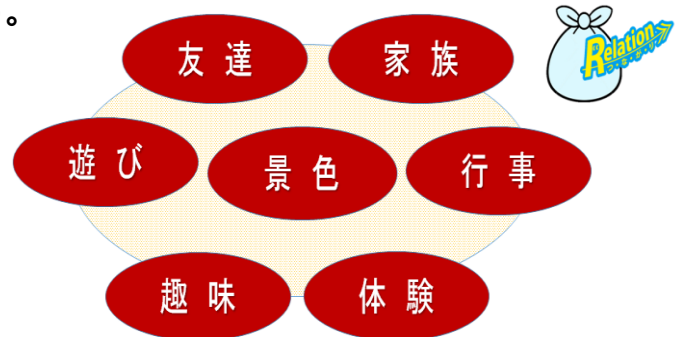
○ では続いての議題に参りましょう。続いて の議題はこちらでございます。

### 『心に残っている瞬間!』

私たちのまわりに目を向け、多くの人たちの知恵と創造によって  
豊かな生活環境がつくられていることに気付きましょう!

○ “心に残っている瞬間”を思い出してみましょう。

皆さん、人生が長い方も、まだ短い方もいらっしゃるかもしれませんが、長い方はそれなりに思い出深い“心に残っている瞬間”というのが数え切れないほどあると思うのですが、今日はパネラーの皆様にも、心に残っている瞬間を思い出していただきたいと思います。



○ 友達、景色、体験、家族ということですが、それでは先川さん、お友達ということで、先川さんはお友達が多そうですね。

## 友 達

つながりグループ 先川 且民

(先川) 1番にきましたね。私は友達を選ばせていただきました。なぜかといいますと、私は72歳になるのですが、この72年間ずっと友達に支えられて生きてきたところです。実を言いますと、このつながりの代表の川瀬さんとは中学3年生は一緒だったのですが、ほとんど付き合いがなかったのです。その中で、50年ぶりに中学校の同窓会をやろうということで、友達の友達が紹介してくれたのが川瀬さんだったのです。川瀬さんに事務局のお手伝いをいただいて同窓会を実施させていただいた。それからのつながりがあって、今日ここでパネラーとして登場させていただいているという、まさしく「つながり」なのです。

そしてもう一つ、今、司会をしていただいている宇野さんでございますけれども、彼女のお父さんと私は同級生です。この方ともほとんど付き合いがなくて、友達の友達の紹介で中学校の同窓会の事務局をしていただいた。ということで、今なおいろいろな自治の仕事でお付き合いをさせていただいている。まさしくこれも「つながり」かと思いましたので、この友達というものを今後も大切にしていきながら「つながり」を大事にしたいと思っておりますので、これを選んだということでございます。

○ ありがとうございます。友達、皆様も友達はかけがえのない存在ですね。お金を払っても買えないものですから、一生大事にしていきたい存在かと思えます。

○では続いて、友達ときたら家族をお選びになった北岡さん、お願いできますか。先ほども弟さんのお話が出できましたけれども、お願いします。

# 家族

チーム光泉 北岡 沙彩

(北岡) 先ほどに続いて、弟のこととかも絡めながら話したいと思います。私の心に残っている瞬間は、母のある一言ですけれども、それについて今日は話したいと思います。

私には年の離れた弟が2人います。8つ離れた双子の弟ですけれども、弟が生まれたときは私が小学2年生の頃でした。

その頃まではずっと一人っ子だったので、親の愛情を一身に受けていたという自覚があって、でも弟が生まれて、しかも双子だったので、取られたと思ってしまったのです。ただの当時の自分の思い込みでしかなかったと思うのですが、親は全然こっちを向いてくれないというのをすごく感じて、寂しくて。でも母親は双子の弟につきっきりで忙しそうだったので、やはり手伝わないといけないという気にはなっていて、自分なりには手伝うんですけども、前みたいによくは構ってもらえない。それがまた寂しくて、何かもやもやしながら毎日を過ごしていました。

それで一回親に言ってしまったのです。全然こちらを向いてくれないではないかという感じで「ちゃんと構ってよ!」と言ってしまったのです。そうしたら、母は、「沙彩はよくやっているよ、ちゃんと手伝ってくれている」と声をかけてくれたのです。私はその一言がすごくうれしかったのです。全然見てくれないと思っていたけれども、ちゃんと見てくれていたということがすごく感じられて、一言ですごく変わるのだと思った瞬間だったのです。

それからの私は、確かに気にかけてもらえないということを思っていたのですが、そんなことでなくて、私は私でちゃんとやっていたらいいのかと思って、友達にしろ、家族にしろ、たった一言であってもしっかり伝えることの大切さということを学んだ瞬間だったのです。それからは、私はささいなことであってもしっかりと相手に伝えようと心がけるようになりました。

中学校のときに、困っている子がいたのです。私は、先ほども言ったように、悲観的で消極的なので、あまり自分から言えないのです。でも母のあの一言があったから私は変わったと思って声をかけたのです。その子とは今もすごく仲よくしてもらっているの、いいことをしたと自分でも思うのです。だから母のあの一言があったからこそ今の私がいる、そして友達がいる、弟のことも嫌いならず済んだということで、心に残った瞬間ということでは家族を選びました。

○ ありがとうございます。でも勇気が要りましたね、お母さんに対してそうやって、もっと構ってよ、こっちを向いてよというのは、8歳のときに言われたのですね。すごく勇気があった。でも相手に伝えることの大切さをそのときに学ばれたということで、お家元、何か一言いただけますか。

(笹岡) そうですね。うちには、6年生の女の子と下に4年生の男の子がいるのですが、親はなかなか難しいですね。もちろん手がかかるとは下の子なのは当たり前ですけども、上の子にもちゃんと伝えるという、今、おっしゃったことはすごく大事だと思っています。私は甘やかし過ぎなので伝え過ぎているところがあり、逆に控えようかと、今、思っています。(笑い)

# 体験

チーム立命 阪口 元貴

(阪口) すごく感動的なお話の後に、そういう皆様の心に染み渡るお話を私はできないのですが、よろしくお付き合いをお願いします。

私は立命館大学の工学部で建築を勉強しておりまして日本の建築に憧れて、先ほどおっしゃっていた日本の美德とかそこら辺に引かれて、それで自分が幸せになって、建築とはいいものだと思って建築科に入ったのです。

建築は結構見るのが好きで、神社なんかも好きで、自分の好きな建築というのが伊勢神宮と東京カテドラルで、そこはただの広い空間なんです。東京の目白のほうにある教会で、中に入ったらこれの大きさの5倍ぐらいの空間がただ広がっているだけ。それなのに、自分はと感じて、何も考えていないといえますか、無の状態になれるといえますか、多分皆さんはここで何もせずに1時間待てと言われたらひまだと思うのです。でも私はそこで何もせずに時間が過ぎたのです。

その体験というのは、自分が豊かなものになっていると思えるのです。その豊かさというものを提供できるものというのはすばらしいと思いました。先ほど好きな花でアジサイが雨に打たれているのに豊かさを感じたとおっしゃっていたのですが、豊かさというものはデザインをする上で大事だと私は思うのです。建築と生け花、デザインという面では同じ、同じというとおこがましいですけれども、似たようなところがあって、デザインをする上で必ず大事なことは、人々を豊かにできることです。

でもそれがなかなか難しく壁にぶち当たっているのですが、お家元様は花で人々を豊かにできているわけです。それを皆さんに伝える上で自分が経験している豊かさというものがたくさんあると思うのですが、その自分に入ってきたものをどのように還元しているか、その考えといえますか、頭の処理といえますか、転換方法といえますか、難しいのですけれども、自分が感じて豊かなことで人を豊かにさせてあげるといえることは、そこをどのようにやっていращやるのかということをお尋ねしたいと思いました。

(笹岡) 難しい質問ですね。私はどちらかというとアウトプットすることが多くて、こうやってお話しさせていただいたり、生け花の教室でも教えますから、どちらかというとこちらから発信することが多くて、逆にインプットする時間、経験、体験というのを大切にしなければいけないというのは常々感じています。例えば昨日どこへ行ったということをしてできるだけしゃべるようにはするのです。

例えばお稽古のときに世間話でしゃべるようにすると、何回かしゃべっているとうまくしゃべれるようになるというのはあるのかと思います。とにかく人にしゃべる、家族でもいいし、友達でもいいし、お仕事で接する人でもいいし、そうやって何回か話していると、自分の中でそれがどういう意味を持つのかということが変わってくると思うのです。普通の世間話だったのがそこに意味を見い出したり、その時間というのは結構大事かと思っています。

(阪口) では、生活する中で、そこに意味を持たせる、自分の行動一つ一つに意味を持たせる。

先ほど北岡さんが言っていたみたいに、一つの言葉が人を変えたりとか、動かしたりするというのは、そこに自分がどれだけ意味は持たせられるかというのが自分の成長につながって人に還元できるという。

(笹岡) そうですね。とにかくインプットしたものは、まだ咀嚼できていなくてもアウトプットする。

例えばこの間、佐々木酒造さんという京都のお酒屋さんがあって、そこが日本酒を瓶に詰めているんですが、ふだん青い瓶なのをイベントのために赤い瓶に詰めて出したのです。中身は同じ聚楽第というお酒なので味は全く変わらないのですが、その赤い瓶を買った人から、ふだんと味が違うと言って文句を言われたそうです。日本酒というのは味を統一して出しているから違うはずはないのですが、でも違うとおっしゃった。

おもしろいなと思ってその話をしていたら、蜂谷宗苾君というお香の家元がいるんですが、彼が東京の増上寺でイベントをしていて、そのイベントで、窓枠があってその向こうに花があり、そこに白い照明を当てる。それで香りが少し出てくる。反対側は同じ窓枠の中に花があるけれども、そこは紫の照明が当たっている。そこから香りが出てくる。この香りをかぎ分けるというテストみたいなものがあるって、やはり白いほうの香りというのはあっさりとしたさわやかな香りがする。紫のほうは、皮肉なというか、あでやかな香りがするのです。

でも実は、同じ香りを出している。

私が佐々木酒造の話をしたからその話が返ってきて、そうすると、人間というのは香りも味も五感で味わっていて、鼻や口だけではないということを教わりました。とにかくしゃべっていくのが大事なのかと思っています。

○ 今の話はとてもおもしろいお話ですね。でも確かにそういうことはありますね。飲食店さんにブルーとかあまり寒色系はないですね。食欲をかきたてるような暖色、オレンジとか、焼き肉屋さんが青色だったらちょっと行きませんね。赤やオレンジだから行ったりする。私たち人間は本当に五感で動いているところ、考えているところがあるかもしれませんね。

## 景色

かがやきグループ 服部 利比郎

(服部) 私は景色を選びました。

私は基本的に毎日を楽しい人生を過ごすことを心がけているので、心に残っている瞬間というのは今までの人生の中で何があったのかとずっと考えていたのですが、一つ自分の考え方の大転換期があったことを思い出しまして、それで景色という形を選ばせていただきました。

私は元々田んぼの真ん中で生まれた田舎育ちですが、本当に自然とともに毎日を過ごしてきました。そんな中でいろいろな景色を見ることが本当に好きであります。今日のお花もそうだけれども、きれいなもの、本当に自分がそのよさを分かっているかどうかは別としまして、きれいなものは本当にきれいだといつも感じるような性格でございます。

そんな中、ちょうど 20 年ぐらい前に、私は当時サラリーマンをやっておりました、ラスベガスに仕事でいく用事がございまして、1 週間ほど行っていました。そのラスベガス滞在中に、あるオフの日にグランドキャニオンに行こうとお誘いを受けまして、グランドキャニオンに連れて行ってもらいました。皆さんもグランドキャニオンもラスベガスも、写真か、もちろん行かれたこともあるかと思いますが、名前も聞かれたことがあると思います。ラスベガスは御存じのとおり本当にきらびやかな街です。ラスベガスから 40 分ぐらい飛行機に乗って、セスナ機ですが、グランドキャニオンに行きました。私も当時はグランドキャニオンというのは写真でしか見たことがない異次元の世界だったのですが、空港からまたバスで 1 時間ぐらい行って、バスを降りてある建物を出た瞬間にがっと目の前にグランドキャニオンが広がるのです。

このグランドキャニオンですが、ほとんど知らない方はおられないと思うのですが、グランドキャニオンの一番上が元々の地面なのです。あの渓谷はコロラド川などの水の流れが 20 億年、30 億年かけてつくったもので、その壮大な景観を目の当たりにしたときに体が動かなくなってしまったのです。この異次元の雄大さと、20 億年、30 億年かけて作り上げられたその景色を見た瞬間に、当時 30 歳ぐらいでしたので、私の 30 年間なんていうのは本当に点でしかないというので、もちろんそこで一生懸命生きているということを感じさせられたのは当然だったのですが、もう一つ、それまでの自分の視点の狭さというのに気づかされた瞬間でした。

その出発点がラスベガスだったわけですが、片やラスベガスという広い砂漠の真ん中にぽつんとつくられた人工的な都市がある。その反対側で、グランドキャニオンは 20 億年、30 億年かけた壮大な造形美をつくり上げている。この対照的な違いを目の当たりにしました。ラスベガスというのはその中にて 360 度ぐるぐると見渡していると本当にきらびやかな世界です。でも外が砂漠であるということは気づかない。ところがグランドキャニオンに行くと、もうそこに立っただけで全体が見渡せる。そんな違いを対照的に感じて、帰りの飛行機の中でいろいろなことを考えていますと、それが、客観的という言葉と俯瞰的という言葉の大きな違いなのかということに気づかされました。

一方、自分が今まで生きてきた中で、360 度見て、いろいろな人の顔を伺いながら社会人として歩いてきて、自分の意見、主張、感情、いろいろなものを持ちながら、360 度にぶつけ合いながらそして吸収しながらやってきたのですが、もっと大きな高いところから俯瞰的に物事を見ていかなければいけないと思いました。そこで感じる自分の思いが本当はどこにあるかということを見つめていくときには、上からもっと広く、客観的ではなく俯瞰的にそれぞれの物事を考えていかなければいけないということを実感させられた瞬間でした。

そういったことは、本当はグランドキャニオンを見なくても何かのきっかけで、自分の目で見ることによって感じて、自分の生き方や考え方を換えられる瞬間というのはいろいろあると思うのです。

これからもそういったものを大事にしていきたいと思いますが、例えば今日、家元にこうやって立派に花を生けていただいた。この生け花そのものも見ていてすばらしいですけども、私は個人的に、この生け花があるステージ、そしてこのステージを見られている皆さんの姿というのをあの後ろのカメラから見るのが最近が一番好きです。皆さんがいろいろな人の話を聞きながらどういふふうを感じ取られておられるのかなあ、そういったことをちょっと引きながら見ていく、そして自

分がそれをどのように思ったのか、感じたのかというのを考えるようにする癖がついたのかということですが。

これは私自身の話で、心に残っている瞬間というか、心が変わった瞬間というところの御紹介だったのですが、いずれにせよ、今日、先生がおっしゃったいろいろな教えや自分の気持ちなんかをいろいろな人に伝えていくときに、自己満足ではなく人に幸せになってもらえるような発言なり生き方をしていきたいと感じましたので、一つ私の御紹介とさせていただきます。

○ いろいろなお話が出てきて、感動的なお話から、へえ、そうなんだ、というようなお話もたくさんいただきました。



私は考えたのですが、心を豊かにする経験ということをよくおっしゃいますけれども、そうではなくて、一つ一つの体験こそがいかにか心を豊かにしていくか、そういうことを今の皆様のお話を伺いながら感じておりました。そして体験こそが心を豊かにし、一人一人が持っている美意識をどんどん磨いていく、それが体験なのかと思いました。皆様、ありがとうございました。

服部さんの話ではないですけれども、グランドキャニオンまで私は行ったことがないのですが、よく神社の木とかで、それが切られていたりとか、大木の根っこを見たら太かったりしますね。

私は最近思うのです。この木は何十年、何百年、いや、もしかしたら何千年、樹齢が書いてありますから、そう考えたらすごい歴史を見てきた木なのかと思うと、ついぎゅっとしたくなっていつもパワーをいただいています。大木に出会って、樹齢何千年と書いてあると、その年はどうだったのかとパワーをいただけて帰ることが多いです。グランドキャニオンみたいに何億とまでは言いませんけれども、皆様もお近くの神社などで恐らく樹齢何千年という木があるかもしれませんので向き合っていただければと思います。



## エンディング セレモニー

聖パウロ学園  
学園長 馬場 勲 様



(馬場) 皆様、こんにちは。聖パウロ学園 学園長の馬場です。よろしくお願いいたします。

今日は、ひと・まち・未来研究塾『つながり』の大変有意義な講座に参加させていただきありがとうございました。

第1部の「いけばなパフォーマンス」では、「花と向き合う」というテーマのもとに、未生流笹岡 家元の笹岡隆甫様の、すばらしい舞台芸術の「いけばな」を目の前で見せていただき、自然がそこにそのままあるような感じがしてとても感動しました。

私は、高校で世界地理を教えてきました。自分の授業の教材を求めて多くの国を訪れましたが、日本ほど四季が明瞭で、木々や季節ごとの花の種類が多い国は少ないと感じています。このような自然の中で華道をはじめとして日本的な文化芸術が育ってきたのだと思います。

かつて、お家元がお書きになった本を読ませていただきました。その著書の中で華道の歴史は室町、安土桃山、江戸時代、そして現在までずっと続いている世界に誇れる日本の伝統的な文化芸術であることを説明されておられました。改めてそのことを思い出し今日の舞台で生き生きとした自然が「いけばな」で表現されているすばらしさに感動を覚えました。

第2部の「パネルトーク」では、お家元と4名のパネラーが第1部のお家元の講話の内容を踏まえた感想やそれぞれの自分の考えを述べていただき、とても内容の深いトークになりました。今回の記録を冊子にすると伺っておりますので、出来上がりましたら、それぞれのパネリストのトークとお家元の素敵なコメントをじっくりと楽しみたいと思います。

本日の「いけばなパフォーマンス」には、高泉カトリック高等学校の華道部・茶道部所属の生徒たち15名がパネラーや受付その他のお手伝いとして参加させていただいております。お家元から直々にご指導を賜り、非常によい経験をさせていただきました。実は、本校の華道部の生徒たちは、未生流笹岡 教授者の高瀬美佐甫先生に学校のクラブ活動で指導を受けています。生けたお花を南草津駅改札口前のロータリークラブケースに展示させていただいております。学校には月1回、指導をしていただいております。その時に「いけばな」を廊下や校長室の前、玄関などに生徒と一緒に飾り展示をしていただいております。学校で「いけばな」を飾られた時は空気全体が何とも言えない温かい、落ち着いた学園になるのです。

高泉カトリック高校の姉妹校であるアメリカのミシガン州の高校生が来日した時には、異文化理解の一つとして高瀬先生のご指導で「いけばな」を体験しますが、大変興味を持ってチャレンジしています。

今回、このような「花と向きあう」イベントを計画して実施いただきました関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

華道 未生流笹岡  
家元

笹岡隆甫 様



(笹岡) ありがとうございます。こうして皆さんとこの場にいられてとても幸せかと思っております。ここから何かを生み出せると本当にすてきだと思います。先生方のお話、馬場先生と服部様のお話を聞いて、海外に行きたいなと思っています。



立命館大学大学院  
理工学部  
建築都市デザイン学科  
阪口元貴



(阪口) 本日は大変貴重なパフォーマンスとご講話をしてくださりありがとうございました。会場の皆様もご参加をくださりありがとうございました。

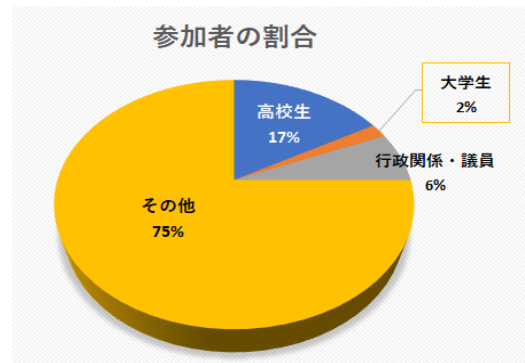
今日のお話を聞いて、“いけばな”というものは人の人生であるという、そこに美しさがあるという話の中で、私たち「つながり」グループは去年から、草津をよくしていこうという活動を始めました。多世代が交流して学んできております。草津をよくするにあたって、それぞれが「この街をどうしようか」とか、「どうしたらよくなるか」と考えて、意見を出していくことが何よりも大切なことで、やがてその意見は、それぞれが花となって草津という街に一つの“いけばな”が創られていくように思っております。

これからも草津をよくするために私たちは頑張っていきますので、皆様も御参加していただいてもよろしいですし、応援のほどをよろしくお願いいたします。ありがとうございました。



《参加者の状況》 入場整理券回収分

男性 30名	高校生 18名
女性 78名	大学生 2名
合計 108名	行政関係 7名
	一般 81名
	合計 108名



《運営スタッフ》

- 進行 川瀬孝弘、舞台補助 木村 哲、効果(録音・照明・音声記録) 福島(ロマン楽器)
- 映像 川瀬善行、同補助 阪口元貴 写真記録 田中香治、坂口元貴の友人
- 受付 チーム光泉 13名
- いけばなパフォーマンスのお花持ち 光泉カトリック高校華道部 2名
- 会場設営 チーム光泉、チーム立命、かがやきグループ、つながりグループの全員



つながり

932

研究塾のサイト

ひと・まち・未来研究塾

『つながり』

<https://tsunagari932.net>

左のキーワードで検索ください

**「過去」と「今」そして「未来」をつなぐ、人の命**

※ 学問の要は、事物のリレーションを知るにあり 《福沢諭吉》

ひと・まち・未来研究塾『つながり』

第2期第1講座の記録

HP掲載用 ダイジェスト版